

元祖ツイッター、渡邊欣雄さんのつぶやきとあしあと

梅屋 潔



梅屋 潔(うめや きよし) 神戸大学大学院国際文化学研究科准教授・国際文化学部併任。日本学術振興会特別研究員平成八年度DC2、JICA国際協力事業団専門家、日本学術振興会特別研究員PD、東北学院大学教養学部助教を経て現職。呪詛をはじめとする日本の民俗宗教・東アフリカの妖術・邪術信仰をテーマにフィールドワークを行う。共著書に『憑依と呪いのエスノグラフィ―(浦野茂・中西裕二と共著)岩田書院、二〇〇一年、『文化人類学のレッスン―フィールドからの出発―「増補版」』学陽書房、二〇一一年など。

一 はじめに

渡邊欣雄さんとの縁は、二〇有余年さかのぼる。話は私事になるが、一九九〇年ごろ、私が「文化人類学」と出会ったのとちようど時を同じくしている。多くの研究者志望の学生と同じく、将来についても不安をかかえ、当時はやりの「五月病」にきっちりやられたこともあって、大学に通うことの意味も見失

いかけていたところのことだ。省みると、この時期は、研生活とはいかなるものかを学習し、その道に足を踏み入れるかどうか考えていた時期だったから、渡邊さんの存在は当時の私にとって、人生設計のモデルのひとつとしてかなり重要な位置を占めていたはずである。ほとんどの方にはどうでもいいことだろうが、この類いの文章には覚え書きのような意味もあるかもしれないから、この機を捉えて思い出せることどものいくつかを書き留めておくことにする。

初対面の印象はほとんど覚えていない。おそらく、「慶應人類学研究会」のあと大勢の研究者たちや大学院生たちと混じって、慶應義塾大学のある三田の山にあるどこかの居酒屋で同席したのがはじめてだったのではないかと思う。

いま思えばほぼ同時に、その後の私の人生でお世話になることになる先達のほとんどに出会っている^①。そのころ同時に出会った教師のなかの一人で、二〇年以上先輩である渡邊さんを、あえて「渡邊先生」ではなく「渡邊さん」と書く理由は、私が制度上渡邊さんの講筵に列したことがない、とか、沖縄や中国などの調査地域、風水、親族研究などのテーマ、あるいは分析をすすめる際の地理的關心など渡邊さんの人類学をすくなくとも表面上は私が継承していない、ということもあるが、渡邊さんのスタイルともおおいにかかわりがある。およそ「先生」らしくないのである。何かを体系立って教わったことはたぶんない。また、渡邊さんの人となりを読むときまずまちがいがなく触れられるであろう頻繁に行われた酒場での議論でも、その内容は基本的にモノローグであり、独白にちかい。教育的効果を期待してながしかの知識や議論の作法や、技法を伝える、というよりは、とにかく自分自身が議論を楽しんでしまうようなところがあって大所高所からものを言う、ということがない。ときには自ら問題を提起して自ら悩んでしまうこともあった。渡邊さん自身、何かを教えているという自覚もないのではない。

極端に、いささか挑発的な表現で言えば、「渡邊さんに直接教わったことはない」と言つてさしつかえないほどである。もちろん、

先に触れたように、研究者というのがいかなる生き物なのか、身近に接することで学ぶところは多かった。いうまでもないことだが、付け加えておこう。

二 渡邊さんと「宴」

渡邊さんは、「宴」が好きだ。二〇〇四年に「アジア遊学」の一卷として上梓された『世界の宴会』の編者でもある^④。日本・韓国・中国・フィリピン・クルグスタン・スリランカ・オマーン・モロッコ・ケニア・ヴァヌアツ・フィジー・ミクロネシア・カナダ・ニュージーランドなど文字通り多様な世界の宴が集大成された楽しい本だ。執筆陣も人類学者や民俗学者だから、網羅的と言うよりはその地域の独自性に特化した宴会文化が紹介されている。一見迂遠にみえるが、「宴会を通して、その社会を知る」という野心的なものだ。

そのなかにおさめられた渡邊さんの筆になる「日本の宴会から世界の宴会へ」を一瞥して、若者は「宴会の催し方が下手」などという一節をみつけると、当時のわれわれの飲み方もひそかに採点されていたのかもしれないと疑いたくなる。

伊藤幹治氏と共著で、ずいぶん若いとき、まだ二〇代の頃に『宴』という本も出している^⑤。「こちらのほうには、会社勤めはしたことがないはずなのに、「宴会が会社の意向とあれば、幹事の重責に耐えないものもある。」などと、幹事になりかわってその苦勞を訴えるフレーズもある。私が出会った当初渡邊さんは四二、三歳で、現在の私と同年齢だったはずだが、すでにその世界の重鎮であり、現在とさほどかわらない長老の風格があった。おそらく若いうちから膨大な文献を世に出していたため、私の目には実年齢よりも高齢にうつっていたのであろう。

さて『宴』で「宴の象徴的世界」について論じる渡邊さんは、「無礼講」を人類学の儀礼論でよく知られる「コミュニタス」の一形態であるとし、「そこには権威もなければ、富の差も、名誉も、道徳もない同質で平等な世界がある」^⑥という。それは、共有と共飲の世界であり、一体となった人々の集合体である。『我』と『汝』のしきりが、先輩と仰ぎ、後輩と育てた超えがたい年序が、ヨソ行きの正

装が、種々の敬語であらわされた会話が、礼儀正しい動作が、その他いっさいの常規が、宴の佳境に入るにつれて、みごとに崩れ、乱れ、壊れるさまをわれわれはこの世界で経験する。^⑦私が渡邊さんと不定期的におつきあいでしてきたのは、まさにそうした時空間のなかだった。

よく、授業の終わった渡邊さんと、あるいは研究会の終わった後にその時の報告者を囲んで、たいていは三田の山の中華料理店、居酒屋、屋台などで「宴」が開かれた。私たちは、講義の時間よりもずっとながい間、「文化人類学」や「沖繩文化」「親族研究」そして「風水」を世間話的に楽しんでいたのであった。研究会への出席率も、渡邊さんは非常に高かった。また、授業でも研究会でもないのに、渡邊さんを囲んで、六本木の中華料理屋で会食した記憶もある。そういつたさまざま宴の席で、渡邊さんは斯界の長老・重鎮の風格を漂わせていたが、その権威が場の雰囲気を抑圧的に働くことはなかった。

楽しい、という意味では今振り返っても当時ほど楽しい時は、その後はたぶんない。もつとも大きな理由の一つは、私自身また学部学生であり、成績などの関係もなく、ニュートラルな立場から最先端の研究に触れることができたからだが、大学全体もまだのんびりしていたということもあるだろう。

しばしば、ほかの大学からのお客さんもあった。成城大学の岡野宣勝氏や森田真也氏もときどき姿をあらわしていたように記憶する。沖繩研究者ではない私が沖繩研究者のおおくと顔見知りとなり、のちに渡邊さんとともに『沖繩民俗辞典』^⑧の編集にたずさわるメンバーのほとんどと交流浅からぬものがあるのは、ひとえに渡邊さんをつうじてのことである。

私が渡邊さんの講筵に列したことがない、と書いたのは比喩でもなんでもない。私は渡邊さんの授業を文字通り、とったことがないのである。

渡邊さんは、このことを大いに誤解して、私が講義を欠席しているにもかかわらず酒席にだけ出席していた印象をもっているらしい。この点はこの際、きちんと誤解を解いておきたいのだが、私が渡邊さんの大学院の講義や

演習の教室にいたことはないのは、履修して
いながら欠席していたわけではない。当時私
は学部学生であり、渡邊さんの講義の時間
は学部の正規の授業に出席せねばならなかつ
たのである。渡邊さんの聲咳に触れたのはも
っぱら講義のあとの酒席においてだったのは、
こうした事情による。

この間の事情については、自信がなかつた
ので同級の中野紀和氏（大東文化大学）に確
認したところ、以下のような返事だった。「私
たちがマスターのときは、渡邊欣雄さんの授
業はありませんでしたよ。けっして、酔っ払
ってあなたの記憶が飛んでる、ということでは
ありません。私が渡邊さんと面識ができた
のは、それよりずっと後だから」（電子メール
による私信、二〇一二年一〇月二二日）。

だから、渡邊さんとおつきあいは、ほと
んどすべて「酒の上でのこと」である。
本稿の記述も、すべて「酒のうえのこと」
とご寛恕いただけると信じる。

三 渡邊さんの「独白」

渡邊さんを少しでも知る人には、私が先に
書いた「モノローグ」「独白」ということが、
渡邊さんのどんな特徴をあらわそうとしてい
るか説明の必要はないだろう。

誰に対してもものを言っているのかよくわか
らない独白のような言葉が繰り返される。常
に「ツイート」であり「つぶやき」めいた言
葉が、研究会の会場でも、酒場でもつぶやきだ
されていたように思える。スマートフォンど
ころか、携帯電話が普及する前のことである。
だから渡邊さんは「元祖ツイッター」である。
その「つぶやき」はとくに酒の入った「宴」
の席でその真価を発揮した。ときに神がかつ
たシャーマンの「託宣」のように見えること
もあつたほどだ。しかしそのシャーマンはと
きに頼りなく、少しすると前言とはまたちよ
つと異なる（異言？）あるいは前言に批判的
な別の「託宣」を紡ぎ出すのである。

独白の妙はなかなか文章では伝えたいが、
おもいつくままに渡邊さんがつぶやいていた
こと、渡邊さんにかかわる印象に残る出来事
をできるだけ「復讐」（渡邊さんの口癖である）
しながら、いくつか紹介しよう。たとえば、
八〇年代に大流行だったクリフオード・ギア

ツ（Clifford Geertz: 1926 - 2006）の解釈人類学
については、次のようにつぶやいていた^⑦。

「象徴の定義が気に入っていて引用もした
のだが、象徴人類学だと思っていたら、そう
じゃあない、解釈人類学だと言いだめた。
そこまですぐとよくわからない」。

その当時、人類学を学び始めたばかりの私
は単純に解釈人類学を象徴人類学のなかに含
めればいいと考えていたので、渡邊さんの悩
みはあまり共感することができなかった。そ
の場でも、たいした相づちはうっていないよ
うに記憶している。ギアツが当時ほど注目さ
れていないころから渡邊さんはその論文を引
用していたようだ。時代を先取りした、とい
うような気負いは感じられなかった。わか
らんものはわからん、というつぶやきである。
私の記憶が正しければ、この話を聞いたのは
三田の大学仲通りにあるこじんまりした韓国
料理店である。時間は授業の合間で、外はま
だ明るかった。

あるいは「文化」概念については次のよう
に「つぶやく」。

「文化とはいったい何か、かつては人類と
動物の区別を文化の有無にもとめていたが、
最近の霊長類の研究成果によるとどうも猿で
も文化を持つ、といえそうだ。そうすると文
化人類学の対象はいったい何だ、ということ
になる。それでおれもちよつと困ってるんだ」。
言いながら突如笑い出し、大きく膝を掌で打
った。

その世界の権威にあまり本気で困られると、
その入り口に立とうとしている僕らはもつと
困るんだけどな、と言いたくなるようなつぶ
やき。私は実際にそう発言したかもしれない。
これは深夜、終電間際に田町駅芝浦口の屋台
でのことだった。たぶん二次会か三次会だつ
たらう。

すでにのべたが、一九九三年、私が大学院
に進学すると、残念ながら渡邊さんの慶應義
塾大学大学院での授業はなくなっていた。事
情はよくわからないが、サバティカルで中国
に在外研究にいったのではなかったのだら
うか^⑧。そう考えると、六本木での会食は非
常勤講師としてお目にかかれなかったので、か
壮行会のような主旨で開催されたのだとして
得心がいく。その時にアジアのどこか（漢字

圏だったはず)に「風水先生」として紹介された記事を見せていただいたと記憶しているが、これは最近二〇一二年一〇月九日、三田仲通りの韓国料理屋「東光」の宴席で「そんなはずはない」と否定されている。「風水は迷信だから」というのだが、どこでどう記憶を間違えたのか、不思議な感じがする。

その後の記憶は慶應義塾大学のある三田ではなく東京都立大学の伝統ある「社会人類学研究会」や日本民族学会関東懇談会(一九九四年度は都立大学が担当校)などのあとの「宴」である。おもに都立大学のある南大沢やそれにほど近い京王多摩センター駅付近のそれになる。私が一橋大学大学院に通うようになって、アフリカのフィールドワークに着手するようになると、渡邊さんに会う機会は年に一回の日本民族学会(現在では日本文化人類学会に改称)だけになった。二〇〇〇年からは私は関西に居を移したので、ますます縁遠くなった。

断片的な記憶のなかから印象にのこる場面を拾おうとしても、すでに紹介した三田でのそれを除くと渡邊さんのおつきあいは飄々とした印象を残しているだけで、明確な像をむすばない。それ自体が渡邊さんらしい、といえはそうなのだが。やはり三田の宴は元祖ツイッターにとつても特別だったのだろうか。修論発表会や学会の研究大会(一九九九年)が都立で開催された時には、そこにいたはずの渡邊さんとは話をしなかったようである。都立で行事が行われていたときに海外出張で不在、ということも数度あったように思う。

「社会人類学研究会」にお邪魔した際には、発表者がプレゼンを終えると同時に、お土産にもらったらしい泡盛をすぼんと開けて飲み始め、他にもすすめはじめた。その後懇親会に移動する際も南大沢駅のプラットフォームをゆらり、ゆらりと行ったり来たりしていた。

あとで高倉浩樹氏に聞いたところでは、一応、発表中は飲まない、という暗黙の了解があったそうだが、当時の私は東京都立大学社会人類学研究室の自由な雰囲気にかされた。都立社会人類学研究室伝統の「年齢階梯制」のおそろしきについてまだ多くを知る前のことである。

マラリアで駒込病院に入院していた片上英俊氏^⑨を見舞った後に研究会に顔を出した際には、お目にかかっていないと記憶する。そのときの発表は、当時もはや珍しかった親族研究(たしか発表者の所属は東大大学院だった。司会は綾部真男氏^⑩)だったので、お会いできるかな、と思つてうかがったのだったが残念だった。

話は前後するが、一九九五年大阪で開かれた第29回日本民族学会研究大会会場の休憩室で、久しぶりに会つたらしい、おそらくは中国からの研究者と再会をよろこび、あらためて名刺交換していた際に、「以前は教授ではなかったか」と指摘され、「そう、おれ、教授になつたり、助教授になつたりしてんの」と短く応えていたことも印象に残る。武蔵大学から都立大に移籍するときの降格人事を人ごとのようにつぶやく。相手にはたぶん十分な説明にはなっていないと思うが、そんなことはお構いなしである^⑪。このように、渡邊さんは、自分の身分のことなどもふくめて、森羅万象あらゆることに対していつも飄々としてつぶやいていたのである。

いつのころだったか、風のたよりに、当時首都大で最年長教授となつていた渡邊さんに「元気がない」という話を聞くようになった。口さがない大学院生の噂話だとは思つたが、すこし気にはなつていた。東京都立大学が首都大東京になつてさまざまなかかわり、多くの同僚が首都大をあとにした。外部からは噂に聞くだけが、激動の変革期をひとり残された観のある渡邊さんが牽引していくのはさぞかし大変だっただろうと推察する。しかし、それだけではなかった。

この謎が解けたのは、二〇〇九年三月に渡邊さんが首都大学を辞して、中部大学に転任するにあたり開催された「最終講義」の「講演録」を読んだときのことである。渡邊さんは、静かに、しかし激しく怒つていたので。

四 「書き魔」渡邊

渡邊さんの研究業績の多さについては、私などがいうまでもなく、誰もが承知していることであろう。記憶は曖昧だが、私はあるときJR御茶ノ水駅のプラットフォームで、川田順造、小松和彦の各氏と渡邊さんが語らつて、

互いに「よく書くね」と言い合っているという場面に遭遇したことがある。渡邊さん以外は歴博フォーラム「動物と人間の文化誌」の帰りであり、『民族学研究』の編集会議で学会館に向かう途中だったと思う。

このようにたくさん書く研究者たちは、どこか構造がふつうの人と違うのではないか、と思うことがある。最近多くの研究者たちが在学中に博士論文を書くようになり、その大半が大部の著作としてそれを刊行する。しかし、その後もコンスタントに書き続けるかどうか、というところではない例も多い。渡邊さんをはじめ、ずっと書き続ける人は、昔も今も、それほど多くはないのである。

渡邊さんの生産性は、どうみても脅威であり、われわれ学生のなかでもその理由や説明について話題になることが何度もあった。大学院生時代、宮下克也氏から仄聞いたことなのだが、渡邊さんは海外で交通事故に遭って死線をさまよった経験があり、それで生き方を考えるようになったという。その一環として生き急ぐように書き継いでいる、というわけだ。

それでかなり長い間納得したつもりになっていたのだが、最近出版された埼玉大学の文化人類学教室卒業生有志による、教室の思い出を残すために編集した出版物^⑧や最終講義の「講演録」^⑨を読むとどうもそればかりではないらしい。そこには学部学生時代から「書き魔」として有名だったとの記述があった。学部雑誌『胎動』や文化人類学教室機関誌『アントロポス』に「山ほど」エッセイを書いているという^⑩。卒業に際しては、主専攻だった文化人類学教室に『地域社会の構造分析』三七四枚を提出しているのみならず、地理学教室にも二四四枚の副論文『文化地理学の理論構造』を提出しているのだ^⑪。当時の論文は当然原稿用紙に手書き。大部の論文をリヤカーで運んだとの伝説もあるという^⑫。

宮下氏から聞いた話に疑問をもっているわけではない。彼に語ったとおり、渡邊さんが事故の経験のある種ターニングポイントとか、覚悟を持つきっかけのような印象でとらえていることは事実であろう。しかし、その影響は主観的にはあったとしても、それとは関係なく以前からたくさん書く人だったわけだ。

このことは、渡邊さんのつぶやきぐせと関係があるだろうと思われた。「つぶやき」だから、ある意味で読者の反応を待つことなく、二の矢、三の矢を放っていくことができるわけである。ダイアログなら、一度次の手を打つ前に相手の反応を見る時間的な余裕を見る必要があるが「つぶやき」にはその必要はない、ということだ。

思えば当時の人類学は一連の民族誌批判によってきわめて内向的な方向に偏りがちで、書くことに関してずいぶん神経質すぎるくらいだったので、どんどん書いていく渡邊さんの立場はかえって新鮮だった^⑬。しかし、このことは、先に触れた「怒り」にも結びついていたのである。

五 元祖ツイッターの静かな「怒り」

渡邊さんは、失礼だが、たいそう無邪気に自分の感情をあらわす方である。

私があるとき、古書店で入手したレイモンド・ファースのサイン入りの書籍『人間と文化』^⑭をお見せしたときは、それを本気でほしがっていた。あぶなく、差し出しそうになったほどである。渡邊さんにはこうした格好をつけない正直なところがある。

いっぽうで渡邊さんはかなり「気にしい」でもある。その点もあまり渡邊さんは隠そうとはしない。

先日第二四期日本文化人類学会長としての最後のスピーチが広島大学の第46回研究会懇親会の会場で行われたときも、「法政大学での挨拶のときには長かったとおまえにあとで言われた。今度は短くすつきりと行くから」と言い残して壇上へ向かった。そんな失礼なことを言ったのか、と内心恥ずかしくなつたが、全くそのことは失念していた。このように、私のような若輩のひとことも、かなり気になるようである。たぶんそういう「気にしい」である点も、つぶやくように書くことによつて昇華し、きつと生産性に結びつけてしまうのではないかと楽観的に考え、私はうらやんでいた。しかしそれも、渡邊さんの最終講義の「講演録」を読む前までのことである。

「六〇年代学部生からの現代人類学批判」という挑発的な副題をもつ渡邊さんの最終講

義は徹頭徹尾昨今の若い研究者を批判するものだった。誰からかは失念したが、私にも案内が届けられ、私の手帳にはその日付にしるしがつけられていた（別な用事で出席はできなかった）。

渡邊さんは、自分の学部時代の知的シーンを振り返り、当時からポリテイカル・エコノミー研究はマクロな視野に入れたものも含め、存在した、ということ、ポストモダンとはモダンとの連続を意識することなしにはありえないこと、また人類学は当時から歴史性を意識した動態的なものであり、「時間」を視野に入れていない研究ばかりだということ認識は誤りであることを指摘した。マーカスとフイツシャーやクリフォード以前の文献を読むとうとしない大学院生たちに、きわめて教育的な「お説教」をしていたのだ。

また自身の経験から、人類学的フィールドワークが現地の社会自身に歓迎されるケースがあり、調査する側、書く側の権力性にもとづく非対称的関係を強調する¹というよりそれだけを訴える²。ポストモダン人類学の議論にひきずられがちな若手研究者たちの態度を根本から手厳しく否定したのである。

出席できなかつた私には、最終講義の現場の雰囲気はわからない。しかし、この「講演録」を読んで、ふだん感情を無邪気に表していたはずの渡邊さんの、二〇年間秘められた渾身の「怒り」と、二〇二〇年の孤独を感じとつた。それと同時に、「渡邊さんが元気がない」という噂の背景や実態が一举にわかつてしまったような気がした。

渡邊さんは、マーカスやフイツシャーの議論をとりあげて民族誌批判を再批判する代わりに、表面上はそれを無視して、どんどん民族誌を書いていくことを選んだのだ。ギアツについて早くから言及していて時代を先取りした気負いなどともないことだった。ある種の流行には渡邊さんはいらだちを感じていたのにちがいないのである。ある意味では二〇二〇年の渡邊さんの仕事は、こうした研究シーンに対する、「元祖ツイッター」らしい痛烈な批判の意味もあったのだ。

沖縄ではびつくりしたりするど靈魂を落とすまい、正常な精神状態ではなくなるという考え方がよく知られている。

マブヤーウチというこの状態から人をもとの状態に戻すためにはマブイグミ（魂込め）を行わなければならない。迷子になった魂のための酒席をあつらえて、おびき寄せる。「マブヤーマブヤーウーテイクヨー、マブヤーマブヤーウーテイクヨー（魂よ、魂よ、お戻りください）」と唱えるのである。渡邊さんは民族誌批判で驚いて魂を落とした若手研究者のマブイグミを行おうとしていたのだ。おそらくそれは、研究会の度に繰り返されていたのに違いない。ただ、最近の若手のマブイ（魂）は、なかなか酒席にはつられず、元祖ツイッターの唱えごとにも反応しない傾向にあったようだ。

渡邊さんが大好きだった、ツイッターがその神がかり的な真価を発揮する、かつては機能していた「宴」が機能不全におちいりつつある現在、この静かな怒りの「独白」が、どの程度当時渡邊さんの周囲に届いていただろうか、という点には疑問が残る。「ゼミの席上、『ゼミ合宿やコンパを予定したい』などどわたしが提案したところ、コンパや合宿はしたくないなどという学生もいたりして、最近が集まりや会合を嫌う者までが出るほどになった」³などという告白を読むと、なおのことである。

六 国分町の夜

若干の空白を置いて、久しぶりに元気な渡邊さんに会ったのは、二〇〇九年七月二三日、東北大学東北アジア研究センター主催の研究会で渡邊さんが発表したときだった。中部大学に移ったばかりで、意気揚々という感じだった。当時仙台にいた私を、東北大の高倉浩樹氏が誘ってくれたのだった⁴。

講演会は一六時三〇分からだったが、私は別に用事があった、またしても飲み会から参加することになったので、いつものことながら、渡邊さんの誤解を招く紹介に閉口した。

「こいつはおれの授業は出ないで、飲み会にだけ来るんだ」。

これが事実でないことは、本稿で検証したとおりである。当時まだ検証前の私は、有効な反論はできず、ただにやにやしていた。あまり面識のなかった東北大の先生方や大学院生たちは、大いに誤解したようだった。

何軒めかの中華料理屋で、高倉浩樹氏と私を並べて、「教え子」のように扱ってくれたのは、意外でもあり、うれしかった。都立大学院出身の高倉氏は間違いなく制度上の教え子であるが、私は全く違うからなおさらだった。

しかしそのあと、心のなかでつぶやいてみる。酔いがまわって気が大きくなっていたからだろうか。

「でも、本当はあんまり教わってはいないだけだな」。

もちろん、この物言いは大いに単純化されたものである。九〇年代は、このように自らが研究する姿で後進をひっぱっていかれた教育がまだ成立していた時代でもあった。

私が、ツイッター／フォロワーのモデルで渡邊さんと自分の関係を明示的に考え始めたのは、たぶんそのときがはじめてである。渡邊さんは社会人類学ツイッターであり、風水ツイッターであり、沖縄研究ツイッターであり、知識人類学ツイッターであり、人文地理学、経済地理学ツイッターである。私たちは、ただのフォロワーなのだ。

そう考えると、さまざまなことが非常にすっきり理解できるような気がする。いくつかの記憶に残っている出来事をこのモデルに当てはめてみても、かなり蓋然性が高いことに気づかされた。

七 むすび

こうやって思い出してみても、いくつかのエピソードのなかでも例外的なほど、九〇年代初頭の三田の町でたびたび催された「宴」で起こった出来事はビビッドに思い出される。そのころの三田の宴の席は、渡邊さんがぼそぼそとではあるが闊達につぶやくのにふさわしかったし、そのツイートをフォローするのにも絶好の環境だった。二〇数年たって三田の町もさまがわりしたが、渡邊さんのつぶやきとあしあとは三田のあちこちに残っている。

あのころ、一次会から二次会へ河岸を変え、狭い慶應仲通りを今よりも二〇数歳若かった長身の渡邊さんがゆらりゆらり、悠然と三田の町を歩いていたのを今でもはつきり

イメージすることができる。私たちはある時期近くからそれを眺め、渡邊さんのツイートのフォロワーとして、そのつぶやきに耳を傾けながら、数歩か数十歩かわからないが、渡邊さんについて歩いていたのだ。

三田にも縁遠くなつたいまはちよつと遠くから渡邊さんが歩いていくのを眺め、そのつぶやきをときどきフォローしている。

滞在時間は比較的短かった高蔵寺や松本町にも、渡邊さんのつぶやきとあしあとはいくつか残っているはずだ。おそらくは、二〇一二年四月以降の渋谷にも次第に増えていくことだろう。それをどうするかは、渡邊さんよりは、むしろそのときどきの環境やフォロワーの姿勢にかかってくるのだろう。あのころの渡邊さんと同じ年になった私たちも、そろそろフォローされる側にたたなければ、と時折思う。二〇数歳若い小生意気な学生を前にして、果たして元祖のように飄々とふるまいうるであろうか。

元祖ツイッターがいきいきとある種神がかかりにも似た験力、教育的効果を發揮するのは、経験則からいっても教室よりむしろ宴の「コミュニティ」の席だと私は思う。当時の三田にその条件が非常によくそろっていたことを私は幸せだったと思っている。

① そもそもこのきっかけは、「おもしろい授業があるからもぐつてみよう」と友人に誘われ、迷い込んだ阿南透氏（江戸川大学）の「洋書購読」であった。テキストは、アダム・クーパーの『人類学と人類学者』（Kuper, A. 1996, *Anthropology and Anthropologists: The Modern British School*, London & New York: Routledge.）とレンサ・ヴォート編『比較宗教学論集』（Lessa, William A. & Evon Z. Vogt(eds), 1979, *Reader in Comparative Religion: An Anthropological Approach*, New York: Harper & Row.）だった。その後はASAモノグラフスを中心に読んでいた。大学院受験者や大学院生も多く受講していて、その縁で当時大学院生だった多くの先輩と知遇を得た。中西裕二氏（日本女子大学）、塩月亮子氏（跡見学園女子大学）などである。あるとき阿南氏が、「今日このテキストの编者であるヴォートが慶應で講演会を行うので関心がある者は参加

してよい」とアナウンスしたことが、今考えると私の運命を変えた。私は人類学に本格的に出会ってしまったのである。しばらくして、中西氏の仲介で吉田禎吾先生の大学院の授業を聴講するようになった。ほぼ同時に、宮家準(慶應義塾大学)、鈴木正崇(慶應義塾大学)、和崎春日(中部大学)、阿部年晴(埼玉大学)、末成道男(東京大学)、渡辺公三(立命館大学)、浜本満(九州大学)、真島一郎(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)などの諸先生と出会った。鈴木先生は学部のゼミ、宮家先生は大学院修士課程の指導教員で、浜本先生は後に所属することになる一橋大学大学院博士後期課程の指導教官である。その他非常勤で出講していた先生方にも、立場を越えてずいぶんいろいろな方面でのお世話になった。私が所属していた慶應義塾大学では、ただでさえ幅広い文化人類学、民俗学、宗教学の分野を社会学専攻の中の二名の専任教員で担当していたために、学部と大学院社会学研究科含めて非常勤講師を充実する方針で運営していたようである。その後、小松和彦(国際日本文化研究センター)、波平恵美子(お茶の水女子大学)、福田アジオ(神奈川大学)といった錚々たる碩学の先生方の聲咳に接する機会を与えられている。より詳しくは、鈴木正崇、二〇〇二年、「文化人類学の再生産 慶應義塾大学の場合」『折學』第一〇七集、二九三―三二〇頁。この文章は改稿されて左記に公開されている。

<http://keionthropology.fc2web.com/kenkyusisus2012.htm> [二〇一二年一月十六日参照]。

② 渡邊欣雄編『世界の宴会』『宴会』なくして『社会』ありやいなや?』(アジア遊学第六一号)、勉強出版、二〇〇四年。以下『世界の宴会』と略す。

③ 伊藤幹治・渡邊欣雄『宴』ふおるく叢書六、弘文堂、一九七五年。以下『宴』と略す。

④ 『宴』一〇二頁。

⑤ 『宴』一〇二頁。

⑥ 渡邊欣雄・佐藤壮広・塩月亮子・岡野宣勝・宮下克也編『沖縄民俗辞典』吉川弘文館、二〇〇八年。

⑦ 特に客員教授としてギアツの代表著作『文化の解釈学』の訳者の一人である吉田禎吾先

生がいたこともあり、私もかなりギアツの議論に傾倒していた。慶應の人類学も宗教学人類学の一大拠点の様相を呈していたと、当時を振り返り、また当時の学生でいま研究生活を送っている顔ぶれをみると思う。関係する研究者や大学院生が多数執筆している『コスモスと社会―宗教学人類学の諸相』(吉田禎吾・宮家準編慶應通信、一九八八年)も出版されてまもなくだった。それだから私も当時自分でつくったワープロの名刺には「宗教学専攻」と印字していたことがあるが、これは、初対面の長島信弘先生によって非難されることとなった。その一件については拙稿「アチヨワ事件簿」『アリーナ』第四号、二〇〇七年、三四六頁参照。

⑧ ご本人に確認したところ、以下のような返信があった。「一九九三年度、確かに一年北京に研修に行った。研修先は前半が首都師範。四月から九月まで。後半は北京師範大学に。一月から三月まで」(電子メールによる私信、二〇一二年九月二日)。

⑨ 片上英俊氏は『世界の宴会』の執筆者のひとつでもある。片上英俊「二つの宴―ケニアの農村生活から」『世界の宴会』一四四―一五一頁。

⑩ 現在は首都大学准教授。

⑪ 渡邊さんをよく知るある研究者は、この人事を都立大学の権威主義のあらわれとして批判していたが、私立と国立の双方のシステムを知るようになった現在、定員の関係だったのではなかったかと推測している。

⑫ 『埼玉大学文化人類学ことはじめ』埼玉大学文化人類学ことはじめの会編、発行、二〇一〇年。以下『ことはじめ』。これには「最終講義」も一部割愛されているが再録されている。

⑬ 渡邊欣雄「講演録」持続可能な理論構築のために―六〇年代学部生からの現代人類学批判『社会人類学年報』三六号、二〇一〇年、一〇二―一二二頁。以下「講演録」。

⑭ 『ことはじめ』一五八―一五九頁。埼玉大学文化人類学教室で一年後輩にあたる中牧弘允氏によれば、『アントロポス』は創刊号が出ただけで廃刊となったという。目次も採録されているが、渡邊さんの論考は「風土生態学的文化類型」一本だから「山ほど」書いたと

すれば『胎動』のほうであろう。私には『胎動』のほうまで検証する余裕はなかった。中牧弘允「研究室のなつかしくもおぼろげな思い出」『ことばはじめ』八八一―一〇二頁。

⑮ 「講演録」一二二頁。

⑯ 『ことばはじめ』一七九頁。

⑰ ただ、私よりもやや下の世代になるとどうとらえているかはわからない。どうも、民族誌批判の影響はその後二〇年ちかく続いたようだから、こうした議論に積極的にかかわらない渡邊さんに物足りなさを感じる学生がいても不思議ではない。

⑱ Firth, Raymond (ed.), 1957. *Man and Culture: An Evaluation of the Work of Bronislaw Malinowski*.

London: Routledge & Kegan Paul Ltd.) 東京、神田「一誠堂」のシールが貼ってあり、ドン・リチャードとシンシア・スミス、ユニヴァーシティ・カレッジ、ナイロビとの書き込みがある。

⑲ 『世界の宴会』四頁。

⑳ 二〇〇五年から二〇〇九年まで仙台にある東北学院大学に奉職していた私は、その後高倉浩樹氏、政岡伸洋氏らと震災についての調査に取り組んでいる。その一端については拙稿「遠くから私が気仙沼にこだわるいくつかの理由―「ドキュメント」のひとつとして」『季刊震災学』第一号、東北学院大学、二〇一二年）を参照されたい。